

芭蕉百々條秘解

中村俊定文庫

文庫 18

1006

4



芭蕉百々條秘解



芭蕉百十條秘解

昔の辯論

待て起ると



昔の混紙の件より古物の元初を知り形化
あれも陰陽安かそれの切字たしていなぬ
及理知のへ——此の事と成る事と切字
こゝろで混紙の事あるも昔の切字の免
りしきと目録目録の区別をいして切字
とてしる極の切字の区別をいして

執中の法

始 水場の事と云ふ言の意 終

水場の事と云ふ言の意

始 申終 始よ時の昔のよ何んあんと申して

いふに面あるか 申すに申すに

らの化りし

昔の事論いふにたまたま今あつた

よして知る

胎の希論

詩に定まらば又兼と云

一 天宮成所より生れりて昔より天也

胎也まゝ生れ胎の別也 胎也是地

如今の理之胎は生れし字一と云

昔の事論いふにたまたま今あつた

よして知る

胎の事

字の式

新編

言くまらむとてさしなむる花

のふしあはらむ日つと

初をたふのふしに四玉

の妻に赤帯のふし

はまをたぐれし初編

此ふきえぬまゝのふし

の如きふし初編のふし

秋の給をこゝろふし

遠

心

比

今武の神の節

夫つあつたのふし初編のふし

此ふきえぬまゝのふし

初編のふし初編のふし

此ふきえぬまゝのふし

山法のふし山のふし

初編のふし初編のふし

此ふきえぬまゝのふし

初編のふし初編のふし

五

と知らんよと老翁の妻の口
舌せあはれうに物よを交

に 年中の物の向ひを暮の月
の光

古式に字書はなす今世にゆくは
まの

月 物とてなすはなすはなす
ぬの光とてなすはなすはなす

極 極の極とてなすはなす

ぬの光とてなすはなすはなす

なすはなすはなすはなすはなす
ぬの光とてなすはなすはなす
ぬの光とてなすはなすはなす
ぬの光とてなすはなすはなす

ぬの光とてなすはなすはなす

ぬの光とてなすはなすはなす

しるしをいふにたゞの物なればとてしるしの物なり

表の西の紀の年

五の月より月の表の地より入る一せり月を
月の表にすくく新なる水あり月を此推
の例なりしをいふに一は月を月の新
くは種々の地なり

表の西の式

表の西に神ありしは神のいにおよぶ
ありしをいふにたゞの物なればとてしるしの物なり

カキ又 表の西に今あるものなり

神の物なるは 今あるものなり

西の 神の物なるは

今あるものなり

今あるものなり

今あるものなり

今あるものなり

本行今もいよてあるものなり

古式五義の説 今式と壽の説

五月園序 山歌の歌子歌規

是曲終りしも啼流しきりし

是歌の歌餅曲の歌流流の歌流流

不易流りの歌

本行字の事

古式十種

物の歌あはれにゆゑに古月

遊玄種 流のいよてしきりし

是れをいよてしきりし

長言八十の歌酒及びのきりなけに

あはれに流のいよてしきりし

是れをいよてしきりし

象水流の流の流の流

濃祈

度つよつとくさきのねむり

百のねむりなきはるの目

境祈

此よきとくくはねの鹿

空よきとくくはねの鹿

境よりてねむりあらし守

空よきとくくはねの鹿

空よきとくくはねの鹿

空よきとくくはねの鹿

一三祈

洪よきとくくはねの鹿

空よきとくくはねの鹿

書祈

空よきとくくはねの鹿

空よきとくくはねの鹿

空祈

空よきとくくはねの鹿

七式ねむりあらし守

ねむりあらし守

年賀婚札 新定出候 和

皆之其の忌向お心給出候と云

法程候の寸括

之其の忌向を勿論申候所曰迄之儀
傷の爲式より之儀より名付を印して始
紙に此の儀を念に申すのは此例に依り
ありては候も申す候も申す候も
まゝに候と云

善悪の扱

善悪の扱を候時人新定は善悪の扱に
善悪の扱に依りて御の字より申す候
に候て之の意は善悪の扱に依りて
申す候時新の扱に依りて申す候
又新の扱に依りて申す候に依りて
申す候時新の扱に依りて申す候
申す候時新の扱に依りて申す候
申す候時新の扱に依りて申す候

うまのし家道たる人ニ格別の手し推抄の長
ニ格別の手し付くつらめに手梅只格抄の心は
しよとよまふ付の心もうらむを

格別手梅の条

つねの心は手梅の心は手梅の心は手梅の心は

格別手梅の格

しよの心は手梅の心は手梅の心は手梅の心は
しよの心は手梅の心は手梅の心は手梅の心は

しよの心は手梅の心は手梅の心は手梅の心は

しよの心は手梅の心は手梅の心は手梅の心は

しよの心は手梅の心は手梅の心は手梅の心は

しよの心は手梅の心は手梅の心は手梅の心は

しよの心は手梅の心は手梅の心は手梅の心は

しよの心は手梅の心は手梅の心は手梅の心は

しよの心は手梅の心は手梅の心は手梅の心は

一 字ニ字ニ字歌七歌詩句ある
 梅もさし子歌出格割りて長歌詩句の歌
 一と宮あそびたりし歌もさしあそび
 河原と宮のそと句化と字物は縦歌と
 雑物と横歌と

歌勅の説

梅の横の勅はあそびりて勅と勅と
 ろもそと勅の句ととと勅と勅と
 一と宮あそびと勅と勅と

二 字物 あり

字物はあそびりて勅と勅と
 一と宮あそびと勅と勅と

六 義 諸 説

ソエウタ
 風 賦 比 興 附 頌
 カソウウタ ナソラエウタ タトエウタ タコトウタ イロエウタ

多詩の風物頌のそと勅比興のそと神
 あそびのそと勅を勅と勅と勅と勅と
 皆神と勅と

風

風の吹くは 風の吹くは 風の吹くは
風の吹くは 風の吹くは 風の吹くは
風の吹くは 風の吹くは 風の吹くは

賦

賦の 賦の 賦の 賦の 賦の
賦の 賦の 賦の 賦の 賦の
賦の 賦の 賦の 賦の 賦の

比

比の 比の 比の 比の 比の
比の 比の 比の 比の 比の
比の 比の 比の 比の 比の

典

典の 典の 典の 典の 典の
典の 典の 典の 典の 典の
典の 典の 典の 典の 典の

雅

雅の 雅の 雅の 雅の 雅の
雅の 雅の 雅の 雅の 雅の
雅の 雅の 雅の 雅の 雅の

頌

頌の 頌の 頌の 頌の 頌の
頌の 頌の 頌の 頌の 頌の
頌の 頌の 頌の 頌の 頌の

此の如くは、
理屈の如くは、

此の如くは、
理屈の如くは、

理屈と理屈の論

理屈の如くは、
理屈の如くは、
理屈の如くは、

理屈の如くは、
理屈の如くは、

理屈の如くは、
理屈の如くは、

理屈の如くは、

理屈の如くは、
理屈の如くは、
理屈の如くは、

理屈の如くは、

理屈の如くは、

理屈の如くは、
理屈の如くは、
理屈の如くは、

是の何人の何用と誰かまきと此に

は取説とて佛世界の事

は之誰に誰かして佛世界の事か

附合年月日の論

為の何年より何年とて何日あるを

そはに何年の何日より何日あるを

七名の二種の事

有心 心具人

空境 視悲

迎与 時高

時高 天家

今将

今将 向月 時高

まきと

有心

あふ人の形容は能くあふの徳は老若男のまきと
見まて字とてまきとあふはまきとあふのまきと

今将

人情はまきとあふのまきとあふのまきと
あふのまきとあふのまきとあふのまきと

迎与

あふのまきとあふのまきとあふのまきと
あふのまきとあふのまきとあふのまきと

そ人

あふのまきとあふのまきとあふのまきと
あふのまきとあふのまきとあふのまきと

于坊

前白のそし語し〜正徳格と云ふ部よの
山川地名をよと坊の正徳令解のあま

時

あつたのこゝろ〜時々のそし語し
正徳のそし語し

時

四季の時をよと云ふそし語し
正徳のそし語し

天象

日月星のそし語し〜天象のそし語し
正徳のそし語し

正徳のそし語し〜天象のそし語し

時

正徳のそし語し〜天象のそし語し

観

毎のそし語し〜天象のそし語し
正徳のそし語し

併

併に軍書物語のそし語し〜天象のそし語し
正徳のそし語し

空

八神のそし語し

空院

降子に就の夕。ちつて
却年毎にこれと先の日也

世を〜世を〜

十回〜の〜

勝城を〜多岐新振ま〜

万能の只一身のたれの果

あるは〜心も〜

今解

常〜に〜

堂の〜と〜

ある今解〜

常〜と〜

遊子

心〜と〜

精〜の〜

白附

白附の〜

あるは〜心も〜

肝要也

此情

五十六本因中のねのあつちから

あはれに極よむるにや

ある風多指の可哀のこころを

は里りもむねのこころ

観念

後もしもあまの表の表

あまの切をいふに

對身

親の位牌もあまの表を

三法四名の法

有心。今釋。近る。三法と云ふ。對身觀念

對身

四名と云ふ

四名の法は、母の法を又三法

は因中の四名に、此法、教達と云ふ

は因中の有心、今釋、近る、因中、と云ふ

此法、教達と云ふ、四名の四名の法は、

此法、ある人、此法、の、法也

隨、ある法、在、此、法、也

故にあつて對しては、
物と故とを別考す

洋不
あつての故を思ふに、
物と故とを別考す

素丸

古—の四道も
今—に法をえす

今—に法をえす

古式—の論

系感動—の論

古式—の論

是等—の論

體—の論

少體—の論
らるの論
また、
又、

備子の内には

あつたはこけり

あつたはこけり

備名よめのさし

あつたはこけり

あつたはこけり

あつたはこけり

あつたはこけり

あつたはこけり

あつたはこけり

あつたはこけり

あつたはこけり

あつたはこけり

あつたはこけり

あつたはこけり

あつたはこけり

あつたはこけり

ふんりせとふたのひまといふに
御借のめく曲高きまもく
のまも知らんふたにうらまも
汗流るる能く者かへし

御そつ論 心の御借
御の御借

御借のまもくも御借のまもく
まもくにもまもくも御借のまもく
の御借のまもくも御借のまもく

心の御借の御借の御借の御借
まもくも御借の御借の御借の御借
今に御そつ論の御借の御借
御そつ論の御借の御借の御借

水仙花 水仙花
水仙花

流石の御借の御借の御借の御借
御借の御借の御借の御借

只 昔の境

地の方角をさし——勿論

にまのりつていふ事からいへば地の方角に依

るにまのりつていふ事は地の方角に依る地

の方角に依る地の方角に依る地の方角に依

る地の方角

古式

——

—— 一 象の象

二 象の象

心の中の時 挨拶の解

意中切なる地割る地論

凡十八のうねり心切なる地割る地論

意中切なる地割る地論

心切なる地割る地論

心切なる地割る地論

心切なる地割る地論

三田幸子の日記へ 振替して見られた時
「身はさうなまを改められたり」

此の甲子日記

此の日記は、幸子の日記を、
改められたり、

この日記の、改められたり、

この日記の、改められたり、

此の日記の、改められたり、

二作の日記

是れらの日記は、
改められたり、

古くからの日記

此の日記は、
改められたり、

等類の編

摺書 古集 胎日集 句
及身 説

此の日記は、
改められたり、

一字海行の糸

古奥の枯風や才枯風はも中竟る

持たしつゝの情よ 予今葉よ七の

梅を 世間の一文字海行

前との流

あまを流るるまよ了る断る

白根のち會へんちるる

と梅のよ後歌の時も

多紙經舟の書法

多紙經舟の書法

多紙經舟の書法

多紙經舟の書法

多紙經舟の書法

多紙經舟の書法

天明と明石の浦

水陸の行船

ふとら又つ從らる月の雲の河の雲に花を

夢は花の解もつるに花は

夢の心よとよめい

夢の心よとよめい

夢は花の解もつるに花は

夢の心よとよめい

夢の心よとよめい

夢の心よとよめい

夢の心よとよめい

夢の心よとよめい

夢の心よとよめい

夢の心よとよめい

夢の心よとよめい

夢の心よとよめい

夢の心よとよめい

夢の心よとよめい

夢の心よとよめい

夢の心よとよめい

二 俳諧 神祀にて... 秋の... 神の白く

三 俳諧 神生座... 白く... 秋の...

四 俳諧 神生座... 白く... 秋の...

五 俳諧 神生座... 白く... 秋の...

六 謎字 力ぞの格... 秋の...

七 空戯 戯れて空... 秋の...

八 鄙言 俗言... 秋の...

九 狂言 狂言... 秋の...

俳諧 俳諧の浄

七の... 俳諧の... 浄... 秋の...

一十三年の句を序に

今更なる悟

自家の情をいふにあらざるは、
食ふにあらざるにあらざるは、
たゞも言ふ事の誠をいふなり

執筆の覚悟

切紙の通り、勿論、
紙の通り、勿論、
紙の通り、勿論、
紙の通り、勿論、

水詞の説

詩の形、歌の形、
詩の形、歌の形、
詩の形、歌の形、
詩の形、歌の形、

叶韵式

何れをいふ

五十字より、
五十字より、
五十字より、
五十字より、

漢和の法

漢和の法、
漢和の法、
漢和の法、
漢和の法、
漢和の法、
漢和の法、
漢和の法、
漢和の法、

二四石の積りたる一斗化の位證をいふ

俳の辨句

多岐漢句也

千句の式

十百多念せり多句とて略して其の多
多ありしを之に法上のいふかたは
「一月にたき字面をたき徳也」
「即評宗也」といふは

天神 書も重像もも活花菓子

四神酒

千句席儀

- 一 毎の五條をさしおりの如し
- 一 句の多し年へ
- 一 打越礼の句を

一 膳の膳取のしむぢりて

一 句合のしむぢりて

一 書付のしむぢりて

一 板筆のしむぢりて

句上一路のしむぢりて
句取のしむぢりて

い時をばとてはるのしむぢりて
しむぢりて

句のしむぢりて

しむぢりて

しむぢりて

如くはしりてはしりては

其の句はしりてはしりては

其の句はしりてはしりては 満願の生理

其の句はしりてはしりては 及び

短冊す法

短冊す法の短冊 幅二寸長三寸五分

短冊す法の短冊 幅二寸長三寸五分

至人用

幅二寸五分長三寸五分

至人用 幅二寸五分

至人用 幅二寸五分

見

前

見 前

初

前

初 前

附

前

附 前

形

前

形 前





